

COLUMN: リリー・フランキー『あっぱれB級シネマ』

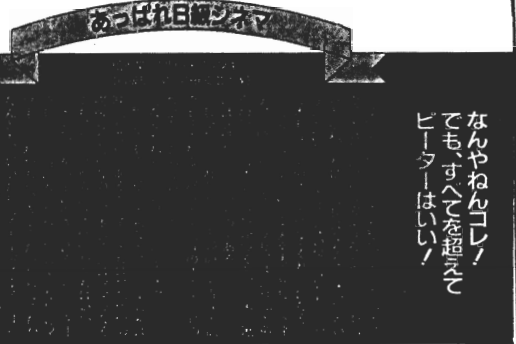
「ぴあ」の「今週注目の特集上映」欄に連載されているリリー・フランキーの映画評『あっぱれB級シネマ』は、小さいコラムながら、独特の文と絵とで、花も実もある、じゃなくて、毒も実もあるすばらしい映画論を毎週展開している。毒とは、「鋭く対象に迫りそれを直截に書いている」ということで、「実もある」とは、それを読んで「実になる＝足しになる」ということ。毒にも薬＝実にもならない評ばかりが載っている「ぴあ」のなかでだんぜん突出している。対象はたしかにタイトルのおとりB級シネマかもしれないが、その評は特A級である。「B級邦画マニア」という肩書きのあとに毎週内容にマッチした副肩書き(?)がついているのも洒落ていて、それも笑える。

最新号(7月23日号)の「薔薇の葬列」では、出だしから「映画の評価というものも結局、玉虫色のモノで、その監督の親戚のような立場で、アレコレと解釈すれば、“コレはなかなか深い”ということになるし、そうでない場合はただ一言“オモロくないの。金返してくれ”になる」と毒をふきつけ、それが、「よしんば、映画が芸術であるとして、それは付加価値の膨脹した芸術なので、本質的にはつまらなくても、どこか別の部分で価値があればいい」と実のある展開になり、「すべての論理を超えてピーターだけがいい」という説得力のある結論で終わる。痛快である。副肩書きの「後衛芸術家」というのもいい。「薔薇の葬列」といえば前衛という言葉がつきものですから。右のコピーを読んで、毒も実もあるリリー・フランキーを味わって下さい。6月11日号では「矢沢永吉/RUN & RUN」(1980年制作)をとりあげていて、「ロック概念」ここにあり“全身ロッカー”矢沢永吉の世界」というのにつられて観にいった。(右のコピー参照)

矢沢永吉はそれまでほとんど聴いたことがないから、「永ちゃんには何の思い入れ」もなかった。ところが、観終わった後には、すっかり「思い入れ」ができあがっていた。4日後の最終日に、ウォークマンで録音する用意をしてみた観に行った。



「薔薇の葬列」は(フランス・フィルム ナイト)特撮にて上映。(P75-78)



なんやねん! ても、すへてを越えてピーターはいい!



「矢沢永吉/RUN&RUN」は、B級邦画で大分映画館にて上映。(詳細はP77-78)



「ロック概念」ここにあり“全身ロッカー”矢沢永吉の世界

MOVIE: 『矢沢永吉 / RUN & RUN』

「矢沢永吉/RUN & RUN」は1979年の名古屋球場でのライブを中心に、リハーサルやインタビューなどで構成されている。16年も前の映画だというのに古い感じがしない。矢沢永吉がどんなミュージシャンで、どんなライブをやっているか、ということにびったり照準をあわせて、それを凝った映像ではなく、わかりやすい映像で表現している。ライブの場面は、矢沢永吉が歌っているを実際に目の前にしているみたいに、ぐいぐいと引きつけられていく。このとき、ちょうど30歳になったという矢沢永吉も「若いなー」という感じがまるでなくて、すでにひとかどの人物だと感じさせる。インタビューにそれがよく出ている。矢沢永吉といえば、なんかしゃべるのがおもしろおかしく伝えられているところがあるみたいだけど、この映画のなかで矢沢永吉の話していることは、実体験にうらうちされた、実体的な思想だということが、じつによくわかる。インタビューで「言葉であそびたくないんだよね。いってどうするの」といっているのは、ほんとうだ。やることをやっている。本気でやっている。

WORDS: 矢沢永吉『矢沢永吉 / RUN & RUN』より

- 疲れたくないと思ってきたねのね、最近。疲れちゃいけないだと思って。それはぜんぶ関連があるわけね。なんちゅうのかねえ、出るとこと引くとこっていうのかな。出るときには、もう誰にも負けないぐらいにやろうと思ってる。現実にはやってる自信もプライドももってるし。でも、引くところがあるから、出るところがいきるんだってことを、最近やっとわかってきたんだよ、俺は。むかしは、なんでもいから出ればいいんだことだけだったのね。これじゃぜったい息がつかまってくるんだってこと、完全にわかったわけじゃないけど。だから人間は、俺はやっぱいちばん大事なことは幸せにならなきゃいけないと思ってる。これは、みんなに伝えることだと思うね。だから自分自身のことだけいえば、もう、言葉であそびたくないってことだけがあるね、いまはね。あそびたくないんだらうけども、むかしの僕だったらいたらうけど、いま僕ねえ、いってどうしたのよって話にかわっちゃうのね。
- やめるときはね、芸能界っていう業界にぶらさがっちゃうかんのね。やめるときはピタッとやめなきゃいけないの。だからなんつうんだろ、芸能界にぶらさがれるってことは、その前に自分が汗かいてないからだよ。かいてないからぶらさがれることもできるわけ。なぜかって、敵をそんなににつくってないから、この業界の中で、それほどね、敵もつくらないで、かといって後半もぶらさがってまで生きるってほどたいした世界じゃないのね、これははっきりいって。
- 俺は俺っていうなかでは、ぜったい汗かくし、本気でやるから、それでもし気に入ったらステージ見に来てくれと。それで気に入ってくれたらレコード買って下さい。それは変わりません。でもレコード買ってもらいたいから、ステージ見に来てほしいから、あんたらに合わせるっていう矢沢にはなりたくない。だから本気はいつも本気よ。

リリー・フランキーの「ロックの概念ここにあり“全身ロッカー”矢沢永吉の世界」にMr.Childrenのことが書いてあるが、「矢沢永吉 / RUN & RUN」を観てから2週間ほど後に「FAN」というテレビ番組に出ているMr.Childrenを観た。Mr.Childrenはライブハウスでやってる頃に数回、デビューしたときのイベントで1回ライブを見たことがあったけれど、全く印象に残ってなかったし、人気が出てからもその音楽が聴こえてきたことがないから、矢沢永吉と同様「何の思い入れ」もなかった。しかし、番組の中でMr.Childrenが演奏しているのを聴いて、そのあまりのひどさに腹がたった。演奏は下手だし、下に出る歌詞を見なければ何を歌っているのかほとんどかわからない。日本語に英語がトッピングされているみたいな感じ。おまけに、その歌詞のもっともらしさ。世の中の表面からブクブク浮かんできていく泡のような言葉。テレビや新聞や週刊誌から垂れ流されているもっともらしい借り物の言葉。テレビ番組はひどかったけれど、CDはどうかと思って、最新アルバム「深海」を買って聴いてみた。他の楽器やオーケストラがはいったりして、すこしはましに聴かせるけど、泡であることにはかわりない。泡なれない。「深海」というんだからね。あんなものはゴメンだ。最近「ぴあ」に載った甲斐よしひろや佐野元春のインタビューに聞いてみることにしよう。中身がないのに、さもさも何かがありそうに思わせる。おなじ「ぴあ」のインタビューでも矢沢永吉だとじつにわかりやすく中身がぎょちり。自分が獲得した思想を自分の言葉で語っている。(下記参照) 公開録音・ライブを試みたという最新アルバム「MARIA」もよかった。

WORDS: 矢沢永吉「ぴあ」1996. 7. 9号

- 矢沢ってのは一匹狼でこの業界を走るようになってたんだね。本当に僕は自分の運命をそう思うよ。キャロルでデビューしたときから俺の周りには、マネージャーとかプロダクションの社長と名の付く奴でロクな奴はいなかった。だから自分で道を切り扱しかなかったんだ。でもな、それはどっちが幸せで、どっちがいいとかは言いきれないですよ。今現在の段階では、あぜ道もあったけど、お前の人生は悪くないんじゃないかって思えるわけですよ。
- 最近自分がいままでやっていないことを覗いてみたい、やったらどうなるのかなって思うんだよ。それがあから公開録音をやってみたり、自分の分野でもない番組に出てみたりね。ひょっとしたら貪欲だからかもしれない。人間なんてそんなにばかばか変わるもんじゃないから、基本的なところは変わってないと思うんだ。ドラマに出たからといってこれから本気で役者をやっていくとは思っちゃいないし。でも台本が面白ければ、これからやるかもしれない。ただ条件がある。そういうことをやるんだらうら、そのぶん本業はもっと凄くないとダメ。ライブもレコードもずーっと良いのを出してないとダメです。
- 俺はファンのためじゃなく、矢沢永吉のために歌うんだって、非常にキザなことを、前から言ってるんだけど、あれは本心です。ファンは確かに大事だけど、矢沢がファンの顔色をうかがったとき、ファンは失望するんですよ。すごく自分のことを分かっていると思うようなファンレターが来ることもあるよ。でも、それはそれよ。歌ったりレコードを作って、それに感動したりってのを全部含めてファンとアーティストの関係ですから。

